

表現と鑑賞をつなげる学習活動を通して、「見る」ことによって表現を多様に広げる学習

～4年「わすれられないあの時（表現）」の実践を通して～

渡辺 悟史

I はじめに

これまでの図画工作科の研究では、以下のポイントを大切にし、これらを踏まえた造形活動づくりを通して、つくる喜びを味わわせることを目指してきた。

- ①児童が自分の感性を十分に働かせることができる活動を工夫すること。
- ②児童が自分の経験を客観視したり、思いや考えを豊かに想起したりすることができる手立てを講ずること。
- ③児童が想像を膨らませてつくることできるよう、題材の趣旨を適切に解釈し、指導計画を立てること。

しかし、しばしば造形活動における指導主体の授業の在り方や児童の受動的な姿が課題として挙げられている。例を挙げると、児童の表現の幅が広がらない（形式的な描き方、つくりかた）、ステレオタイプな表現（空は空色、地面は土色、水は水色、画用紙の中央に規定線、画面の左上に太陽等）で満足してしまふ、少し描いたら「できた」とやめてしまひ、追求することが少ない、「どうやって描くのですか」「何色にすればいいのですか」といった自分で工夫することを諦めてしまふような質問が出る等が図工教師の中でもよく聞かれることである。児童が思いのままに表現することができない現状を打開し、児童のもつありのままの感性を表出させる手立てを講ずる必要がある。そこで本研究では、児童が感性豊かに自分の表現を広げるために、自分の造形経験を基に想像を膨らませ、主体的に造形活動を進めることができる手立てとして、「見ること」に着目し、思いや考えを十分に表現できる造形活動づくりを通して、つくり出す喜びを味わわせることをねらいとした。

本題材は、学習指導要領における表現(2)ア、イ、ウに関する内容であり、これまで自分が経験してきたことの中で強く印象に残っている出来事を選び、それに合った材料や表現方法を工夫して表すものである。自分の過去の経験を作品にするだけではなく、作品を見合い、互いの印象と表現方法の差異を感じ取るとともに、その面白さに気付き伝え合うことにより、鑑賞と表現をつないで学ぶことをねらいとしている。また、自分の経験を客観視することで、なぜ忘れられないのか、どうして表現する必要があるのかについて振り返るとともに、今の自分をつくり上げている出来事であると捉えることで、表現する意味や価値を問うことができる題材でもある。活動では、表現と鑑賞をつなげ思いを豊かに引き出す手立てとして、「試しの活動」や、表現のよさに気付く「見合う活動」を設定した。試すことで自分のお気に入りの形や色を見付けたり、思いや考えを膨らませながら主体的に表現したりする児童の姿を求めた。評価は活動の過程で適時見取することを基本とした。

II 研究の目的と方法

本研究では、表現と鑑賞をつなぎ、多様な表現を見付け、広げていく児童の育成を目指す。そのために、以下の3つの視点から授業や児童の様子について分析する。

- 造形活動に親しみ、表現と鑑賞をつなぐ学習づくり
- 思いを豊かに表現する活動の工夫
- 豊かな思考を促す交流・共有化の工夫



試したことを使って、表現に生かしている姿

Ⅲ 結果と考察

1 造形活動に親しみ、表現と鑑賞をつなぐ学習づくり

(1) 結果

本実践では、表現と鑑賞をつなぐことを主眼にしてきた。「見ること」と「表すこと」は表裏一体であると言われており、図工でも表現と鑑賞をバランスよく指導することとされている。そこで、生活の中で「見ること」の経験を形や色を手がかりにして表現へと結び付ける試みを行った。

題材のねらいは、思い出したことを克明に再現することではなく、表現するにふさわしい「思い」を描くことである。そこで、その「思い」を想起させ、表現につなげるために、様々な画材を使って自由に表現を楽しむ活動（写真1）を行った。使いたい画材を選択して形や色を自由に表現した後に、できた形や色から楽しさやうれしさ、緊張感など、自分なりにイメージすることで、自分の思いや考えに近い表現を発見させ、表現したいことを焦点化させた。

実践では、「試しの活動」により得られた形や色を基にして、「楽しい感じ」や「さびしい感じ」など、形や色に対して自分なりのイメージをもたせた。試しているうちに、「～に見える」という感じをもち、「～の感じだったから～の表現にしよう」と経験したこと（見たこと）と表現とを結び付けて考えようとする様子や、「うれしい様子は～色を使おう」といった自分なりの意味付けをして表現につなげようとする児童の様子が見られた。



写真1 自分の知っている画材で自由に表現を試す姿

(2) 考察

実践を通して、児童にとって自分の思いに向き合うきっかけとなっているのが形や色であることが分かった。「見ること」と「表すこと」をつなげる意図は、児童は「見た経験があることを基に自分なりに意味付け、発想を膨らませることができる」からである。活動では、内容と印象の両面で想起しようと試みた児童がいたが、「何があったか」を思い出すより、「どんな思いか」を思い出す方が表現の幅が広がった。また、表現のために形や色を工夫したり、使用する画材を工夫したりする児童の姿が見られた（図2）。

本題材のような場合、児童はどのように記憶をたどるのかを考慮しておく必要がある。児童は興味のあることしか見ておらず、一つの場面を記憶だけで構成することは非常に難しいことである。しかし、記憶が古くなるにつれて詳細を思い出すことが困難になることがあっても、そのときに感じた思いや感情については、何か（形や色）をきっかけにして鮮明に蘇ることはよくあることである。共通事項である色や形を追求し、自分なりに意味付けを進めることによって、児童は自分の思いの表現に満足するまで迫ることができる。そのような時間を児童に保障することが感性を生かして活動する児童の姿を実現する上でも大切である。



図2 大好きなピアノと演奏の音を形や色を工夫して表現している例

2 思いを豊かに表現する活動の工夫

(1) 結果

本実践では、構想する手立てとして、ワークシートを用いた(図3)。既習事項や積み上げてきた「試しの活動」の結果を生かして、経験したことから表わしたい出来事の思いや雰囲気等を焦点化するようにした。また、表現の際には、自由に描画、着色することで得られる「感じ」に着目

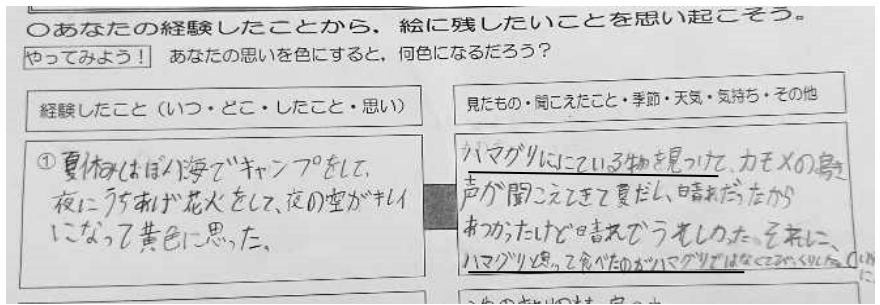


図3 主体性を伴って構想している例～見たものや聞こえたこと、自分を主体としたエピソードを基に思い出している

させ、表したいことを表現するために使用する画材や表現手法等の見通しをもたせた。前時で得られた形や色を基にして、本題材のテーマに迫るように計画を立てて実践した。

児童は自分の経験をキーワード的に理解していることがある。例えば、旅行に行ったときのことを想起する場合、「旅行に行って何をしてどう感じたか」よりも「～に行った」という思い出し方をする。そのため、構想の段階では、忘れられない出来事を思い出す手立てとして、「何をしたか」だけではなく「どんな思いや印象であったか」を中心に思いを深め、ワークシートに記述した。その中から試して得られた形や色と近い内容をピックアップし、作品の基本的なモチーフとした。制作では、多様な画材(水彩絵の具、クレヨン、色鉛筆等)や児童が考案した技法を用いて活動した。

これらの手立てにより、児童がテーマとして選定する内容が「～をした」というものから、「～の思いだった、～のように見えた」という自分の思いを主体とした内容に変容していった。それと試して得られた形と色とのイメージを結び付けることで、自分にとって忘れられない内容であることをフォーカスして制作することができた。

(2) 考察

構想段階で想起させたいことを明確にすることが大切である。本実践では、児童は「思い」を中心に想起したことで、自分の身に起こった出来事をキーワード的に捉えるのではなく、そのときの見たことや活動したこと、感想等、主体性を伴って思い出そうとする姿が見られた(図3)。また、試しの活動とリンクさせることによって、試すことで得られた形や色から出来事を振り返る様子も見られた。このような児童の活動を活性化させているのは、本人しか捉え得ない「感性」そのものであり、それを基軸にして構想や表現、鑑賞の活動づくりを進めることが大切である。

3 豊かな思考を促す交流・共有化の工夫

(1) 結果

作品鑑賞では、作品の見える印象を付箋に書いて貼る活動を設定し、鑑賞者と作品とを関係付けることを目指した。このことで、作者の作品に込めた意図や思いの他に、鑑賞者による印象が加わることになり、作品のもつ意味性が強まるという効果がある。付箋の活用は、鑑賞の際に広く用いられる方法ではあるが、この段階の児童にとっては表現者・鑑賞者双方に「みんなに意見を述べることができる」、「みんなから感想をもらえる」、「自分の発言を客観的に見直すことができる」という点で効果的であると考えられる。本実践では、多数貼られた付箋に書かれた内容を見て、自分の作品を見直す児童の様子が見られた。

(2) 考察

鑑賞は、作品を見るためだけにあるのではない。友達の実践のよさに気付くためでもない。振

り返りも然りで、振り返る意図を明確にすることが大切である。振り返りが重視される学びづくりが盛んではあるが、図画工作で必要な振り返りは、「客観視」であると考えている。鑑賞では、自分の意図した表現がどのように伝わっているかを作品から離れて見直すという機会を設定することが大切であり、その経験の積み上げが次の題材への意欲や期待感へとつながると考える。

IV まとめ

研究による成果と課題は以下の通りである。

1 成果

- 「見ること」と「表すこと」をつなげた学びを計画、実践することで、形や色に対して自分なりの解釈や工夫が生まれた。「試しの活動」で無意識に描いたりつくったりしたものでも、タイトルを付けるなどの工夫により、自分なりの意味付けが始まるようになった。自分にとって価値の高い表現を見付けることが意欲的に造形活動を進めるために必要であると考えている。
- 児童のもつ個々の感性や表現、鑑賞による見方や感じ方を捉え、それらを生かした学びを展開することにより、児童の表現に対する意欲が高まった。活動を工夫して展開することで、児童の意欲を高い状態にし続けることが図工の活動を支えると考えている。
- 試すことが児童の感覚を伸ばしたり、技能を向上させたりすることにつながることはこれまでの研究で明らかであったが、加えて、試して見付けたことを作品に生かしたり、鑑賞の視点として活用したりすることで、児童の技能が高まることが明らかになった。
- 自己評価は、自分の表現やその過程を客観視する上で効果的であった。何を見付けたか、どんな表現があったかなど、視点を決めて振り返らせることは、学びを完結させるためにも必要なことである。また、この実践では、児童は自分の感じ方に主張をもって表現する様子が多く見られた。鑑賞による客観視や学びの振り返りにより、自分のしたかったことを具体化できることが必要なことである。

2 課題

- 児童は、自分の表現について他者がどのように捉えているかを気にしていることも多くある。教師が児童に対してどのような対応をするかによって表現が大きく変わることも考えられるため、見通しをもった声掛けの方法を模索する必要がある。
- 「見ること」と「表すこと」をつなげるために、児童が自分の記憶にある場面や思いを想起するための効果的な手立てを検討していく必要がある。また、それ自体が児童に身に付けなければならない技能であると捉え、学びをつくる必要がある。
- 児童は表現したことを鑑賞を通して客観視するが、次の題材への見通し等、長いスパンでの学びの計画を立てる必要がある。

V 参考文献

- 初等教育資料 No. 947

「特集Ⅰ 各教科において育成を目指す資質・能力②」

文部科学省初等中等教育局教育課程課

東洋館出版社 平成 28 年 12 月

- 初等教育資料 No. 949

「特集Ⅱ 図画工作～鑑賞の能力を育てる」

岡田京子

東洋館出版社 平成 29 年 2 月

- 子どもの絵の見方

奥村高明

東洋館出版社 平成 24 年 9 月

図画工作部会

助言者 吉中 博道（士別市立多寄小学校長）
工藤 朝博（士別市立多寄中学校長）

I 授業の部会（小中合同）から（各班討議のまとめ） ※小学校（図画工作）のみ抜粋 <感想>

○小学校の時期は、児童は表現に触れる初期段階であり、思い付くままに色を使って表してみる経験を積み重ねることが大切である。

→試しの活動は、自己選択の場を与える。試すことによって面白さや引っかかりを感じ、対処しようとするのが次のテーマや技能の伸長につながる。

○色や形にならないものに色を付ける（気持ちや感じ等）活動では、意味付けをきちんと行い、自分なりの理由をもたせることが大切である。

○自分が思い出の中でどう楽しんだか、どう感じたかを自由にイメージを膨らませて色を使って表現する。

○前時の試しが本番にどう関わっているのかを見取る必要がある。学びとして連続性を保つことが大切である。

○前時が本番ではだめなのだろうか。試しの活動での表現が素晴らしいので。

→「試しの活動」では、短時間の活動であること、目的を設定しないこと、計画がないことが大切である。行為を楽しむことが技能を生み出す上で重要である。それを繰り返すことで、テーマをもたせたときにどう生かすか、見通しをもたせることが重要である。

○試しの活動と、本番の比較では、児童の変容がよく伝わる。

○児童は、自分が気になったことを追求している。

○技法にこだわらず、自由に活動し、見付けていくことが大切である。そうすることで、表現に感情が生まれる。

<生活画の指導について>

○この題材の主軸は、児童にある「忘れられないあの時」をできるだけ具体的な形にして、何があったか、何をしたか等の場面の詳細を説明するために描くものではない。どんな思い出に対しても、児童が活動に対してどう感じたか、その出来事をどのように捉えているか、児童にある気持ちや印象を伝えるのである。

○「色はあまり混ぜない方がよい」と発表した児童がいた。理由は、「混ぜると暗い色になる、グロイ色になる」と言った。やってみて気付かせることが大切である。

→混色をすることはだめではないし、補色同士を混ぜて濁った色も悪い色ではないので、それをきれいだと感じる児童もいる。

○初期、前時、本時の作品を比べ、どのような変容があるかを見取る。

○自分の描きたいものと教師の指導の違いから、図工離れが始まる。

○気持ち、印象を表現できる手法を児童が主体的に見付ける機会が必要である。



○キーワードで考えるのではなく(知識・技能ベースの学び), 手法を見付ける(資質・能力ベース)ことが大切である。

II 助言者からの講評

(1) 吉中博道校長先生から

小中で「試しの活動」の実践をしている。図工美術は子供を自由にする教科である。先日、廃材を使って自由につくる活動をした折、「自由と言われても困る」といった声が聞こえた。「自由にやっごらん」といわれて困らない児童生徒の姿を求める。

「試しの活動」は、その自由を得る活動(色や形を作り出せる)である。水墨画であれば、にじみやかすれを使いこなせるようになる。子供の表現したいことが試すことで明確化する。筆の動かし方を体験することで様々な色を使いこなせることができる。本時はそんな時間だったのだろう。

中学校2年生の授業を見たが、小学校のときにはのびのびと表現したはずである。なぜ成長に伴って表現をためらうようになるのか、考えていく必要がある。子供に今まで何があったか、どんな経験をしたかを先生が知ることが大切で、子供の発達段階に応じてどのような表現を獲得していくのかを見ていく必要がある。自由を獲得することだけを追い求めても、表現をし続けることにはつながらないだろう。「発表したい、見せたい」と思える子供、意思・意図をもって表現できる子供を育てるためにどうするかを検討していく必要がある。



(2) 工藤朝博校長先生から



新しい指導要領がどんな意図でできているかを考えていく必要がある。義務教育が何のためにあるのか、その中で、図工美術は何のためにあるのか、どのような役割をもっているのか、なぜ行う必要があるのか、図工美術の中にいると見えなくなることがある。

義務教育は、皆が幸せに生きていくことを求めるためにある。指導要領は道具であるから、使い方間違えなければ役に立つものである。子供が大人になったときに役に立つ資質・能力を培うことや、社会変化(人工知能の発達)に対応し、生かせるように改訂されるものである。子供にはなぜ学ぶのかを伝え、日常生活とつなげて、活用できることを子供に伝えていく必要がある。また、図工美術が生活の中でどのように生かされるかを伝えていく必要がある。図工美術は色や形を学ぶという側面はあるが、人の生き方に即して学ぶ視点もある。人間らしく生きるために、必要なものである。

人工知能の発達、人間の知識を意味のないものにする可能性がある。しかし、図工美術の利点は、「絶対がないこと」にある。社会の変化により、価値や概念も変化する(黒や白はただの比較論である)。色を利用しながら人間らしさを学ぶことができるし、教師の投げ掛けが必要である。物は一面から見ても理解できない。見方を変えることで全体が見えるといったことから、人間らしさを学ぶことができる。様々な見方から学ぶことが大切である。